2012 年　8 月 11 日・「図書新聞」book 欄では

社会的なアンソロジー詩集
『脱原発・自然エネルギー 218 人詩集』が刊行

詩の出版を手掛けるコールサック社から、社会的なアンソロジー詩集『脱原発・自然エネルギー 218 人詩集』が刊行された。同書の刊行にあたって、7 月 25 日（水）東京・六本木の国際文化会館別館にて会見が開かれた。同社代表の鈴木比佐雄氏は挨拶で「詩の中にある予知」について触れた。同書に解説を寄せている若松丈太郎さんは、福島を代表する詩人であると同時に、南相馬市で長く国語教師を勤めていた。当日は片道 5 時間の道のりを、体調不良を押して駆けつけた。福島原発の土地の誘致から建設、そして事故まで 50 年の付き合いになる。ずっと心配していたことが現実になってしまったその無念さに「戦後民主主義のいいかげんさが生んだ」と、ふと本質を突いた声が漏れた。

編集にあたった佐相憲一氏は、詩が現在の日本において存在感と尊敬を失っている理由について、戦前・戦中の著名な日本の詩人たちが「兵士を戦場に送り出す詩」を書いてしまったことを挙げた。戦後詩がその反省からスタートし、現代詩の詩人たちがどれだけ鋭敏に時代を察知し、反応しているかにも言及した。

日英同時に一冊で刊行することができたのは、翻訳の郡山直氏、結城文氏をはじめとするバイリンガルの詩人の活躍があったようだ。帯文は、坂本龍一氏のスピーチ「『アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である』とアドルノは言いました。ぼくはこう言い替えたい、『フクシマのあとに声を発しないことは野蛮である』と。」を引用している。声をあげる詩人たちに続き、脱原発と自然エネルギーへのシフトを訴え続けなければならない。

と紹介されています。